

## ニヴフの狩猟用革帯

狩猟用ベルト(男性用)(標本番号K2417、重さ/320g)

佐々木 利和 (ささき としかず)

本館先端人類科学研究部

革製の帯にさまざまなかたちをした道具が下がっている。これは樺太の先住民であるニヴフが用いていた、いわば七つ道具である。猟に行くときなどに衣服の上から腰につける。

写真(表紙)のベルト先端にはトナカイ角製の帯鉤がつく。右端の筒状のものはトナカイの角で作った針入れ、次は蝶鮫の革製の火打ち石入れ、そしてトナカイの革製の火口入れ、最後に蝶鮫の皮で鞘を作った小刀である。小刀は柄が木製で柄先を削ぎ握りやすくしている。また柄全体に紐状の刻み目を入れて滑るのを防ぐ工夫がなされている。刀身は鉄製で片刃。ニヴフや樺太アイヌの小刀は刀身に比して柄が長いという特色がある。昨年アムール川河口の村で、ニヴフの老媪がこの種の小刀を実際に使用した

のを見た。この手の小刀は現用なのである。蝶鮫の皮を接ぎ合わせて鞘を作る。この技法の鞘もニヴフや樺太アイヌで見るタイプである。



トナカイ角製品にはニヴフ独特の細緻な文様が彫刻され、あるいは透かし彫りがなされるなど、角の加工技術の高さと彼らのすぐれた芸術意識を知ることができる。

この資料は鳥居龍蔵が大正一〇(一九二一)年に北樺太(現在のロシア連邦サハリン州の北部)のティミ川中流域で採集したもので、東京大学理学部人類学教室からの寄託品である。

樺太アイヌも同様の革帯を用いたが、ニヴフのものに比べると幅が広い。これをチシタイキ・クフとよぶが、北海道アイヌには伝わらなかった。樺太アイヌとニヴフとのあいだには技術交流や品物の交換があったらしく、似た作品をよく見ることがある。どちらの民族のものか、注意が必要なところであろう。